

レーニン選集

7

マルクス＝レーニン主義研究所訳



レーニン選集 第7冊 ¥ 280.

1957年11月30日 発行

訳者 マルクス・レーニン主義研究所
レーニン全集刊行委員会

発行所 株式会社 大月書店

東京都文京区本郷1の15
電話 (92) 3091・7887
振替 東京 16387

三晃印刷・田中製本

はしがき

一 この選集は、ソ同盟マルクスレーニン主義研究所編『レーニン二卷選集』をもとにし、同研究所と日本のマルクスレーニン主義研究所との意見でいくつかの論文を加除して編集したものである。

一 翻訳には現行版としてもっとも權威のある『レーニン全集』第四版を底本につかった。全集のどこに入っているかは各論文末に示してある。

一 原注は(1)(2)……でしめして各段落のつぎに、訳注は*印をつけて人名注とともに巻末にかかげておいた。ただし人名注は、本文のなかではいちいち印をつけずに、一括してアイウエオ順に配列してある。なお、本文中(「」内の六号または六ポイント組の挿入は訳者による補注である。

一 訳文のなかで傍点がついている箇所は原文ではイタリック体になっている。ゴシック体のところは原文では同様ゴシック体である。

一 訳出には全集刊行委員会の翻訳者団と校閲者団が責任をもってあたり、術語・用語・文体・字づかいの統一をおこなっている。

目 次

遠方からの手紙	二七
第一信 最初の革命の最初の段階	二八
現在の革命におけるプロレタリアートの任務について	二九
テ ー ゼ	三〇
二重権力について	三一
戦術についての手紙	三二
序 文	三三
第一の手紙 現時機の評價	三四
わが国の革命におけるプロレタリアートの任務 (プロレタリア党政綱草案)	三五
最近の革命の階級的性格	三六
新政府の対外政策	三七
特異の二重権力とその階級的意義	三八
以上のことから出てくる戦術の特異性	三九

革命的祖国防衛主義とその階級的意義……………四六

戦争をおわらせるにはどうしたらよいか？……………四八

わが国の革命のなかで成長しつつある新しい国家の型……………四九

農業綱領と民族綱領……………五二

銀行と資本家のシンジケートの国有化……………五四

社会主義インタナショナル内部の情勢……………五五

ツインメルヴァルド・インタナショナルの崩壊。——第三インタナ

ショナルを創立する必要……………六一

科学的に正しく政治的にプロレタリアートの意識を明晰にするのを

たすけるようなわが党の名称はどのようなものであるべきか？……………六四

農業問題についての決議……………六九

民族問題についての決議……………七二

農民代表者第一回全ロシア大会……………七四

一九一七年五月四—二十八日(五月十七日—六月十日)……………七四

農業問題についての決議草案……………七四

労働者・兵士代表ソヴェト第一回全ロシア大会……………七六

一九一七年六月三—二十四日(六月十六日—七月七日)……………七六

1 臨時政府にたいする態度についての演説 六月四日(十七日)……………七六

スローガンについて 八六

革命の教訓 九六

さしせまる破局、それとどうたたかうか 一〇

飢えがせまっている 一一〇

政府は完全に無為 一一一

統制の方策はだれにも知られており、たやすいものである 一二四

銀行の国有 一二五

シンジケートの国有 一二〇

営業の秘密の廃止 一二三

強制的な団体への統合 一二七

消費の規制 一三〇

民主主義的組織の活動を政府が破壊している 一三三

財政的破綻とそれを防止する方策 一三七

社会主義にむかつてすすむことをおそれて前進することができるか？ 一四〇

崩壊との闘争と戦争 一四三

革命的民主主義派と革命的プロレタリアート 一四六

マルクス主義と蜂起 ロシア社会民主労働党中央委員会への手紙 一四九

革命の任務 一五五

資本家との協調の有害なこと	一五六
権力をソヴェトへ	一五七
諸国民に平和を	一五七
土地を働くものへ	一五九
飢餓と崩壊とにたいする闘争	一六〇
地主・資本家の反革命との闘争	一六一
革命の平和的發展	一六二
ボリシェヴィキは国家権力を維持できるか？	一六四
第二版序文	一六四
あとがき	二〇五
一局外者の助言	二二一
一九一七年十月十(二十三)日 ロシア社会民主 労働党中央委員会会議〔武装蜂起についての決議〕	二二五
ボリシェヴィキ黨員への手紙	二二六
事項注	二三一
人名注	二三一
解説	二四一

遠方からの手紙

第一信 最初の革命の最初の段階

帝國主義的世界戦争が生みだした最初の革命がおこった。この最初の革命は、たしかに、最後の革命ではないであろう。

この最初の革命、すなわち一九一七年三月一日のロシア革命の最初の一段階は、スイスで手にはいる乏しい資料によって判断すれば、おわってしまった。この最初の段階は、たしかに、わが国の革命の最後の段階ではないであろう。

幾世紀も持ちこたえ、一九〇五—一九〇七年のあの三年にわたるもつとも偉大な、全人民的な階級戦をも持ちこたえて、なにがあらうとふみこたえてきた君主制が、たった八日—ミユリコフ氏がロシアの在外代表の全員にあてた高慢な電報のなかで指摘している期間——でくずさるというような「奇蹟」が、いったいどうしておこ

ることができたのだろうか？

自然界にも、歴史にも、奇蹟というものはない。だが、歴史のあらゆる急転換は、あらゆる革命もそのうちにはいるのだが、きわめて豊富な内容をしめし、闘争者の闘争形態と力関係のきわめて思いがけない独特の組み合わせを展開するので、俗物の頭には多くのことが奇蹟とおもわれるに相違ない。

ツァーリ君主制が数日間で崩壊するというには、世界的な重要性をもついくたの条件の、組み合わせが必要であった。それらの条件の主要なものを指摘しよう。

もし、一九〇五—一九〇七年の三年間にわたるもつとも偉大な階級戦と、ロシアのプロレタリアートの革命的エネルギーがなかったとすれば、革命の端緒的な段階が数日間でおわるほどの急速な第二次革命は不可能であつたらう。第一次革命（一九〇五年）は土壤をふかく掘りおこし、昔からの偏見を根こそぎにし、幾百万の労働者と幾千万の農民を政治生活と政治闘争に目ざめさせ、ロシアの社会のすべての階級（とすべての主要な政党）をして、その真の本性、その利害、その力、その行動方法、その当面の目標と将来の目標を、たがいに見せあわせ、全世界にしめさせた。第一次革命とそれにつづく反革命時代（一九〇七—一九一四年）は、ツァーリ君主制の全

本質を明るみにだし、それを「行くところまで行かせ」そののこのうえもない腐敗と忌まわしき、怪物ラスプーチン^{ラスプーチン}を先頭とするツァーリ徒党のこのうえもない破廉恥と背徳、ロマノフ家——ユダヤ人や労働者や革命家の血でロシアの全土をひたしたボグロム組織者、数千万デシヤチナ^{デシヤチナ}の土地を領有して、自分と自分の階級とのこの「神聖な財産」をまもるためには、どんな残虐行為、どんな犯罪もあえてし、どれだけの数の市民を零落させ窒息させようと意に介しなかった、この「同輩中第一等の」地主——のこのうえもない残虐を暴露した。

もし一九〇五—一九〇七年の革命がなかったとすれば、もし一九〇七—一九一四年の反革命がなかったとすれば、ロシア民族とロシアに住む諸民族とのあらゆる階級が、一九一七年の二月—三月革命の八日間に見られたような正確さで「自決」をすることは、すなわち、これらの階級相互の關係や、ツァーリ君主制にたいする諸階級の關係を決定することは、できなかつたであらう。この八日間の革命は、もし比喩的に言つてさしつかえないとしたら、いわば総稽古^{げいこ}や下稽古^{げいこ}を十数回もやったあとで「演じられた」のであって、「俳優たち」はおたがいを、自分の役割や、自分の出場や、自分の書割りを、細大もらさず、すみずみまで、すべての、幾分でも重要な政治的

傾向や行動方式の色合いにいたるまで、知りつくしていった。

しかし、グチコフやミリュコフらの諸君とその腰巾着^{きんぎやく}たちが「大反乱」だとして非難した一九〇五年の第一次の大革命が、一二年後に、一九一七年の「輝かしい」「名譽」革命——グチコフやミリュコフらは、この革命が（さしあたって）彼らに権力をあたえたものだから、この革命を「名譽」革命と呼んでいる——に導いたについては、なお、一人の偉大な、強力な、全能の「舞台監督」、すなわち、一方では世界史の流れを大々的にはやめることができ、他方では、かつてなかったほどに強力な世界的危機を、経済的、政治的、民族のおよび国際的な危機を生み出すことのできる「舞台監督」が必要であつた。世界史の転換の一つにさいして、血と汚物にまみれたロマノフ君主制の荷車が、一挙にくつがえるというには、世界史の歩みが異常に促進されるほかに、これらのとくに急激な転換がいくつか必要であつたのである。

この全能の「舞台監督」、この強力な促進者は、帝國主義的世界戦争であつた。

これが世界戦争だということは、いまではもう争う余地がない。なぜなら、アメリカ合衆國と中國は、きょうはすでに半ば戦争にまきこまれており、あすはすっかり

まきこまれるだろうからである。

この戦争がどちらのがわについても帝国主義戦争であるということは、いまではもう争う余地がない。この事実を否定したり、塗りかくすことができるのは、資本家と彼らの腰巾着である社会愛国主義者や社会排外主義者だけである——または、一般的な批判的規定のかわりに、ロシアでおなじみの政治家の名まえでいえば、一方ではグチコフ、リヴォフ、ミリュコフ、シンガリョーフラ、他方ではグヴォズデフ、ポトレソフ、チヘンケリ、ケレンスキー、チヘイゼらだけである。ドイツのブルジョアジーも、イギリス・フランスのブルジョアジーも、他国を略奪するため、弱小民族を絞殺するため、世界を金融的に支配するため、植民地を分割し再分割するため、各国の労働者を愚鈍にし分裂させることによって、ほろびいく資本主義制度をすくうために、この戦争をやっているのである。

帝国主義戦争は、客観的な不可避性をもって、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの階級闘争を異常に促進し、かつてなかったほどに激化させずにはおかなかった。それは、敵対的な諸階級のあいだの内乱に転化せざるをえなかった。

この転化は、一九一七年の二・三月革命ではじまった。

この革命の最初の段階は、第一に、二つの勢力が協力してツァーリズムに打撃をくわえたということを、しめしている。すなわち、一方では、ブルジョア的・地主的ロシアの全体と、そのすべての無意識的な腰巾着たち、ならびにイギリス・フランスの大使や資本家に代表されるそのすべての意識的な指導者たち、他方では、兵士代表と農民代表を味方に引きつけはじめた労働者代表ソヴェト、これがそうである。

この三つの政治的陣営、三つの基本的な政治勢力、すなわち、(一)農奴主的地主の首長であり、古い官僚と将官の首長であるツァーリ君主制、(二)ブルジョア的、地主的オクチャブリスト的カデットのロシア——小ブルジョアジー(その主要な代表者はケレンスキーとチヘイゼ)がその尻についている——、(三)プロレタリアート全体と貧困な住民大衆全体とに同盟者をもとめている労働者代表ソヴェト——、この三つの基本的な政治勢力は、「最初の段階」の八日間にさえ、筆者のように事件から遠くはなれていて、外国の新聞の乏しい電報しか見られない観察者にさえ、あますところのない明瞭さで現われた。

しかし、このことについてもっとくわしく論じるまえに、私は、もっとも強力な要因としての帝国主義的世界

戦争について述べた、この手紙のまえの部分に立ちかえらなければならない。

戦争は、もろもろの交戦国を、資本主義制度の「主人」であり、資本主義的奴隷制の奴隷所有者である資本家の交戦諸グループを、鉄の鎖で結びあわせた。一かたまりになった血みどろの糸玉——これが、われわれの社会している歴史の時機の社会政治生活である。

開戦当初にブルジョアジーのがわへ寝がえった社会主義者たち、ドイツのダヴィッドやシャイデマンら、ロシアのブレハーノフ、ポトレソフ、グヴォズデフの一派はみな、長いあいだ、革命家の「空想」に反対し、パーゼル宣言の「空想」に反対し、帝国主義戦争の内乱への転化という「幻想喜劇」に反対して、声をふりしぼってわめきたててきた。彼らは、資本主義が発揮したという力や、生命力や、適応力について、節とりどりの讃歌をうたってきた。——彼らは、資本家が各国の労働者階級を「順応」させ、手なづけ、愚弄し、分裂させるのを、たすけてきた。

しかし、「最後にわらうものもつともよくわらう」
「はやまて笑」。
「ではいけない」。ブルジョアジーが、戦争の生みだした革命的危機の到来をおくらせることができたのはつかのまのことであった。さいきん同地を訪れたある観察者の表

現を借りていえば「天才的に組織された飢餓」があるというドイツをはじめとして、おなじく飢餓がせまっているが、組織の点ではるかに「天才的」でないイギリスやフランスにいたるまで、いまやあらゆる国で、革命的危機がおさえがたい力で成長している。

解体がもつともはなはだしく、しかもプロレタリアートがもつとも革命的な（彼らの特別の資質のおかげではなく、「一九〇五年」の生きいきとした伝統のおかげで）帝制ロシアで、どこよりもはやく革命的危機がおこったのは当然である。この危機は、ロシアとその同盟国がこうむった一連のきわめて重大な敗戦によって、はやめられた。敗戦は、古い政府機構全体と旧制度全体をぐらつかせ、これにたいして住民のすべての階級の怒りを呼びおこし、軍隊を憤激させ、こちこちの貴族や腐敗しきった官僚からなる軍隊の旧將校層を大々的に駆除して、それを若い、新鮮な、主としてブルジョア的、ラズノチーネツ的、小ブルジョア的な將校層に代えた。これまで「敗戦主義」に反対してきかびたて、わめきたててきた、ブルジョアジーの露骨な追従者や、まったく無定見な連中は、いまや、もつともおくれた、もつとも野蛮なツァーリ君主制の敗戦が革命的火災の始まりと歴史的に結びついているという事実に向きあせられている。

しかし、開戦当初の敗戦は、爆発をはやめる否定的な要因の役割をはたしたが、イギリス・フランスの金融資本、イギリス・フランスの帝国主義と、ロシアのオクチャブリスト的・カデットの資本との結びつきは、直接にニコライ・ロマノフにたいする陰謀を組織することによつてこの危機をはやめた一要因であつた。

問題のこのきわめて重要な側面について、イギリス・フランスの新聞は、もっともな理由で口をつぐんでおり、ドイツの新聞は、いい気味とばかりにそれを強調している。われわれマルクス主義者は、一方の交戦帝国主義者グループの外交官や大臣のうそ、官製の、甘つたるい外交的なうそにもまどわされず、また彼らの金融上、軍事上の競争者である他方の交戦グループの目くばせや忍び笑いにもまどわされないで、真実を冷静に直視しなければならぬ。二月・三月革命の諸事件の全過程は、つぎのことをはつきりとしめしている。すなわち、その自分の手先や「つて」をもつていて、ずっとまえから、ニコライ二世（われわれは、彼が最後のニコライ帝となるように期待もし、またそうならせるようにつとめるつもりである）とヴィルヘルム二世との「単独」の協定や単独の講和を妨げるために必死の努力をはらつてきたイギリスとフランスの大使館が、オクチャブリストやカデット

と共謀して、また将官の一部や軍隊およびベテルブルグ守備隊の一部の将校と共謀して、とくにニコライ・ロマノフを更迭させるために、直接に陰謀を組織した、ということである。

われわれは幻想をいだかないようにしよう。グヴォズデフ・ポトロフ主義と国際主義とのあいだを動揺し、あまりにもしばしば小ブルジョア平和主義へまよいこんでいる「組織委員会派」または「メンシエヴィキ」の一部の連中のように、労働者党とカデットとの「協定」や、前者の後者支持等々を讚美したがる連中の誤りに、陥らないようにしよう。この連中は、古い、まる暗記した（しかも全然マルクス主義的でない）学説に合わせて、イギリス・フランス帝国主義者が、「第一の軍人」ニコライ・ロマノフを更迭させ、より精力的で新鮮な、より有能な軍人たちに代える目的で、イギリス・フランス帝国主義者がグチコフやミリュコフ一味と共謀してたくさんだ陰謀に、覆い（おほ）いをかけようとしているのである。

革命があのように急速に、またあのように——外見上では、うわべを一瞥したところでは——根本的に勝利したのは、きわめて独特な歴史的情勢の結果、まったく異なるいろいろの流れ、まったく異種のいろいろの階級利害、まったく対立する政治的および社会的志向が、一つ

に融合し、すこぶる「むつまじく」融合したからにはかならない。すなわち、帝國主義戦争をつづけるため、戦争をいっそう狂暴に、頑強に遂行するため、……グチコフ一派にコンスタンチノープル、……フランスの資本家にシリア、イギリスの資本家にメソポタミア、等々を獲得させる目的であらに幾百万人のロシアの労働者と農民を屠殺するために、ミリュコフやグチコフ一派に政権を奪取させたイギリス・フランス帝國主義者の陰謀——これが一つの側面である。他方には、パンと平和と眞の自由をめざす深刻な、プロレタリアのおよび大衆的な革命的人民（都市と農村の貧困住民の全体）の運動がある。

イギリスの金で「つぎはぎした」、ツァーリ帝國主義におとらず忌まわしいカデットの「オクチャブリストの帝國主義を、ロシアの革命的プロレタリアートが「支持」すべきだと論ずるのは、まったくばかげている。革命的労働者は、ある短い、例外的な状況の歴史の時機に、ある君主を別の君主と、しかもなるべく同じロマノフ家の一人と、とりかえようとしたブカナン、グチコフ、ミリュコフ一派の闘争が自分たちを応援してくれたことに有頂天になったり、まよわされたりしないで、忌まわしいツァーリ君主制を破壊してきたし、すでにかなりの程度まで破壊しており、やがてそれを根底から破壊しつく

すであろう！

事態はこういうものであったし、こういうものでしかなかった。眞実をおそれずに、革命における社会勢力の相互関係を冷静にはかり、およそ「現情勢」を評価するさいには、その現在の、こんにちの特異性全体の見地から評価するだけでなく、いっそう深い原動力、ロシアならびに全世界におけるプロレタリアートとブルジョアジーの利害のいっそう深い相互関係の見地からも評価する政治家は、このようにしか、ただこのようにしか考えることはできない。

ピーテルの労働者も、ロシア全国の労働者も、ツァーリ君主制に反対し、自由をめざし、農民のための土地をめざし、平和をめざし、帝國主義的屠殺に反対して、献身的にたたかってきた。イギリス・フランスの帝國主義資本は、この屠殺をつづけ、つよめるために、宮廷陰謀を仕組み、近衛将校と共謀して陰謀を組織し、グチコフやミリュコフらをそのかし、あてにさせて、完全に、お膳立てしてあった新政府をおしたてた。この政府は、プロレタリア闘争がツァーリズムに最初の打撃をくわえてくれたので、権力を奪取したのである。

オクチャブリストや「平和革新派」、絞刑吏ストルイピンのきのうの助手、リヴォフやグチコフの手に真に重

要な部署、戦闘的部署、軍隊、官僚がにぎられているこの新しい政府——そこでは、ミリュコフその他のカデツトは、どちらかといえはお飾りとして、看板として、甘ったるい教授式演説をするために席を占めており、「トルドヴィキ」のケレンスキーに労働者と農民をだますためのバラライカ〔ロシアの絞刑器〕の役割があてがわれているこの政府——この政府は、偶然な人間の寄せあつめではない。これは、ロシアで政治権力に到達した新しい階級、資本主義的地主とブルジョアジーの階級の代表者である。この階級は、ずっとまえからわが国を経済的に支配しており、また一九〇五—一九〇七年の革命の時期にも、一九〇七—一九一四年の反革命の時期にも、さらに——しかもとくに急速に——一九一四—一九一七年の戦争中にも、地方自治体や、国民教育や、各種の大会や、国会や、戦時工業委員会等々を自分の手におさめることによって、非常に急速に自分を政治的に組織してきた。この新しい階級は、一九一七年までにすでに「ほとんどすっかり」権力をにぎっていた。だから、ツァーリズムが崩壊してブルジョアジーに席をあけたすには、ツァーリズムに最初の打撃をくわえればそれで十分だったのである。帝国主義戦争は、信じられないほどの力の緊張を要求して、おくれたロシアの発展の歩みを非常にはやめたので、わ

れわれは、「一挙に」(実際には、一挙と見えるだけだが)イタリアやイギリスや、またほとんどフランスにさえ追いついて、「連立的な」、「挙國的な」(すなわち、帝国主義的屠殺をおこない人民をだますのに適した)「議会」政府をもつようになった。

この政府——現在の戦争の見地から見れば、実質上、数十億金を支配する「イギリス・フランス」商会の番頭にすぎない——とならんで、プロレタリアートと都市および農村住民の貧困層全体との利益を表現する主要な、非公式の、未発展の、比較的弱い労働者政府が生まれた。それは、兵士や、農民や、さらに農業労働者との結びつきを、しかも、もちろん、農民との結びつきよりもとくに、第一に、農業労働者との結びつきをもとめているピーテルの労働者代表ソヴェトである。

これが現実の政治情勢であつて、われわれは、マルクス主義的戦術を、ただ一つそれが立脚すべきしっかりとした土台、すなわち、事実の土台のうえに与えるために、なによりもまずこの政治情勢を、できるだけ客観的に正確に規定するようつとめなければならない。

ツァーリ君主制は打ちくだかれたが、まだとどめをさされてはいない。

オクチャブリスト的・カデツト的なブルジョア政府は、

「イギリス・フランス」金融商会の實際上の番頭として、帝國主義戦争を「最後まで」やりぬこうとのぞんでいるのだが、人民にたいする自己の権力と帝國主義的屠殺をつづける可能性と両立するかぎり、最大限の自由と施しものを人民に約束せざるをえなくなっている。

労働者代表ソヴェトは、労働者の組織であり、労働者政府の萌芽であり、あらゆる貧困な住民大衆、すなわち住民の一〇分の九の利益の代表者であり、平和とパンと自由を獲得しようとつとめている。

この三つの勢力の闘争が、革命の最初の段階から第二の段階への移行をあらわす、現在の情勢を規定している。第一の勢力と第二の勢力とのあいだの矛盾は、深刻なものではなく、現時機（き）の状況によって、帝國主義戦争における諸事件の急転回によって呼びおこされた、一時的な矛盾にすぎない。新政府全体が君主主義者である。というのは、ケレンスキーの口さきだけの共和主義は、まったく本気ではなく、政治家にふさわしいものではなく、客観的には、政治術策にすぎないからである。新政府は、ツァーリ君主制にとどめをささないうちに、はやくも地主ロマノフ家の王朝との取引をはじめた。オクチャブリスト・カデット型のブルジョアジーは、勤労者に対抗して資本の特権をまもるために、官僚と軍部との首長とし

ての君主制を必要とするのである。

労働者はツァーリズムの反動とたたかうために新政府を支持しなければならない、と言うもの（どうやらポトレソフ、グヴォズデフ、チヘンケリらは、そして、いろいろ言葉をにぎしてはいるがチヘイゼもまた、そう言っているようである）は、労働者にたいする裏切者であり、プロレタリアートの事業にたいする、平和と自由の事業にたいする裏切者である。なぜなら、実際には、ほかならぬこの新政府こそ、すでに帝國主義的資本によって、帝國主義的な軍事的、略奪的政策によって、手も足もしばられており、すでに王朝と取引をはじめており（人民の意志をたずねないで！）、すでに、ツァーリ君主制を復活させるために活動しており、すでにミハイル・ロマノフを新しいツァーリの候補に推しており、すでに彼の帝位をかためるため、正統の（適法の、古い法律に依拠する）君主制を、ボナパルティズム的君主制、人民投票による君主制（ごまかしの人民投票に依拠する君主制）とおきかえるために、骨をおっているからである。

いな、ほんとうにツァーリ君主制とたたかうためには、口さきだけでなく、ミリュコフやケレンスキーといった雄弁家の口約束のなかではなく、ほんとうに自由を保障するためには、労働者が新政府を支持するのでなくて、

この政府が労働者を「支持」しなければならない！ なければならぬ！ 自由の、またツァーリズムが徹底的に破壊されることの、唯一の保障は、プロレタリアートの武装であり、労働者代表ソヴェトの役割、意義、力を強化し、拡大し、発展させることだからである。

これ以外のことはすべて空文句とうそであり、自由主義のおよび急進主義的陣営の政治屋の自己欺瞞であり、いんちきである。

労働者の武装を援助せよ、すくなくともこの仕事を妨害するな。——そうすれば、ロシアにおける自由は打ちやぶりえないものとなり、君主制の復活は不可能となり、共和制は確保されるであろう。

そうしないかぎり、グチコフやミリュコフらは君主制を復活させ、彼らの約束した「自由」をなにひとつ、まったくなにもひとつ、実行しないであろう。人民に約束を「たらふくふるまい」、労働者をたますことは、あらゆるブルジョア革命であらゆるブルジョア政治屋がやってきたことである。

われわれの革命はブルジョア革命である。だから、労働者はブルジョアジーを支持しなければならない、——ポトレツフ、グヴォズデフ、チヘイゼらはこう言っている、かつてブレハーノフが言ったように。

われわれマルクス主義者はつぎのように言う。われわれの革命はブルジョア革命である。だから、労働者は、ブルジョア政治屋の欺瞞にたいして人民の目をひらかせ、言葉を信じないように、自分の力、自分の組織、自分の団結、自分の武装だけにたよるように、人民におしえなければならぬ、と。

オクチャブリストとカデットの政府、グチコフとミリュコフらの政府は、——たとえまじめにそうしようとおもったところで（グチコフやリヴォフがまじめだと考えることのできるのは、青二才だけである）——人民に平和も、パンも、自由も、あたえることができない。

平和をあたえることができないという理由は、この政府が戦争の政府であり、帝国主義的屠殺をつづける政府であり、アルメニアやガリチアやトルコを略奪し、コンスタンチノーブルをうばいとり、ポーランド、クールランド、リトワニア辺区、等々をうばいかえそうとのぞんでいる、略奪の政府だからである。この政府は、イギリス・フランスの帝国主義的資本によって手も足ももしばられている。ロシアの資本は、数千億ルーブリを運転する「イギリス・フランス」という商号の世界的「商会」の支店である。

パンをあたえることができないという理由は、この政